

同志社大学一神教学際研究センター

日本オリエント学会 共催

公開講演会

イスラームの宗教性 —日本人の宗教観と比較して—

● 講 師 ●

お だ よ し こ
小 田 淑 子

(関西大学文学部教授)

● 日 時 ●

6 月 18 日 (土) 午後 2 時～4 時

● 場 所 ●

同志社大学 今出川校地 神学館礼拝堂

○入場無料・事前申込不要

○問い合わせ

同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

TEL. 075-251-3972 E-mail: staff@cismor.jp HP: <http://www.cismor.jp/>

プログラム

- 1) あいさつ 中田 考（同志社大学神学部教授）
- 2) あいさつ 森 孝一（一神教学際研究センター長）
- 3) 講演 小田^{よしこ}淑子（関西大学文学部教授）

「イスラームの宗教性—日本人の宗教観と比較して—」

- 4) 休憩
- 5) コメント 三宅^{たけひと}威仁（同志社大学神学部助教授）
- 6) 質疑応答 司会 中田 考
- 7) あいさつ 上岡弘二（日本オリエント学会会長）

～講 師 紹 介～

■ 小田淑子（おだ よしこ）

1948 年神戸市生まれ。1971 年大阪外国語大学ペルシア語学科卒業。1977 年京都大学大学院文学研究科宗教学専攻退学。1978-84 年シカゴ大学大学院神学科宗教学専攻留学。1984-89 年東京大学文学部イスラーム学研究室助手。1989-1997 年京都女子大学短期大学部助教授。1997-98 年関西大学文学部助教授、1998 年・現在同大学教授。2003 年度在外研究で、主にトルコ共和国滞在。

主な著作：編著『岩波講座宗教』『第二巻 宗教への視座』『第十巻 宗教のゆくえ』
共著：『新しい教養 宗教学』昭和堂、1999 年、『現代における宗教の根本問題第 2 巻』「日常性の宗教」晃洋書房、2000 年、『宗教学を学ぶ人のために』世界思想社、1985 年、『宗教における罪惡の諸問題』（「イスラームにおける罪惡観」）山本書店、1991 年等。

～講 演 概 要～

日本人は死者儀礼や祭りに参加するが、無宗教だと公言する。これは宗教を高尚な精神世界か、怪しげな教団かの両極端、つまり健全な日常生活の外にあると考えるからだろう。イスラームは戒律の厳しい一神教、全員在家の宗教で、健全な社会生活を重視する。一神教と戒律を嫌う日本人には分かりにくい宗教である。

イスラームも来世志向だが、現世での社会生活を重視する。人間は個人、精神であると同時に社会的、身体的存在だとみなすイスラームの人間観が、社会や政治に関与する宗教性の根底にある。戒律の厳しさは身体的訓練を通して信仰心を養う方法である。原罪観念のないイスラームの罪惡観を考察し、現代におけるイスラーム社会が抱える問題にも言及する。

■日本オリエント学会について

日本オリエント学会は、1954年に三笠宮崇仁殿下の提唱により設立され、1963年からは、社団法人となった学術団体です。本学会は、古代文明の発祥の地として知られるチグリス・ユーフラテス川流域（メソポタミア）からヘブライ語聖書の故地を経てエジプトに至る、いわゆる古代オリエントだけではなく、これらの地域を中心としてその後の歴史的転変をへて現代にいたる、歴史的にも地理的にもひろい概念であるオリエントの世界を研究対象としています。

古代の言語を読み解くことでその地域の言語、宗教、文化、社会の実態を明らかにしようという研究、この地域を現在おおっているイスラームの文明の諸相を解明しようという研究、現代の国家や地域の諸問題を解き明かそうという研究、これらさまざまな研究対象を、考古学的発掘、歴史や宗教文献の文献学的読解、現代社会の社会科学的アプローチなど、多様な手法を用いて研究しています。北海道から九州まで各地の研究者を会員にもつ全国的規模の学会であり、現在700名ほどの会員がさまざまな研究活動を展開しています。

会員の成果は年次大会で発表されたり、本学会機関誌『オリエント』（年2回刊行）や欧文機関誌Orient（年1回刊行）に掲載されたりします。このほか、これまで学会として数冊の記念論文集を刊行し、一般読者向けの叢書を企画しています。昨年は創立50周年を記念して『古代オリエント事典』（岩波書店発行）を編集・刊行しました。

■一神教学際研究センターについて

「一神教学際研究センター」は、一神教世界について学際的で総合的な研究・教育活動を行い、文明の共存の実現をめざすスペシャリストを養成すると共に、その研究成果を世界に向けて発信し、イスラーム世界とユダヤ・キリスト教世界の「仲介者としての役割」を果たすことをめざしています。

中東で生まれた3つの一神教、すなわち、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは「兄弟の関係」にありながら、欧米とイスラーム世界は対立・抗争の歴史を繰り返してきました。今日の世界が直面している「文明の共存」と「安全保障」の実現のためには、一神教について、文明論的な視座からの、「総合的」で「学際的」な教育・研究活動が必要です。同志社大学は、新島襄による創立以来、キリスト教研究とアメリカ研究に力を注ぎ、高い評価を受けています。「一神教学際研究センター」では、一神教文明をトータルにとらえるために、宗教研究においては研究対象をイスラームに拡大し、地域研究においては、中東・東南アジア・EU・ロシアに拡大し、地域研究、国際関係、安全保障、科学史を含んだ学際的で総合的な研究・教育活動を実施しようとしています。

歴史的しがらみから自由な「外部」に位置する日本だからこそ実現できた研究・教育センターであり、3つの一神教を同時に本格的かつ学際的に研究できる場所は、世界にも例を見ません。また、日本における一神教研究の歴史は浅く、その理解は十分であるとはいえません。一神教に対する理解を高めることにより、その対極にある、多神教に基づく日本文明をより深く理解することにも貢献します。

2005年6月18日(土)

日本オリエント学会・同志社大学一神教学際研究センター共催
公開講演会

イスラームの宗教性 ―日本人の宗教観と比較して―

関西大学文学部 小田 淑子

はじめに

a) 比較宗教学の視点

宗教学はあらゆる宗教を比較し、宗教の多様性と多面性を理解し、宗教とは何か、宗教とともに生きてきた人間とは何かを考察する。信仰を前提とする神学とは異なり、実証的、客観的研究である。異質な宗教の客観的理解とは、どの宗教にも精神の豊かさを認める態度だと、私は考える。

宗教の唯一正しい定義はないが、「人間の有限性を教える」「哲学との相違は、宗教は儀礼をもち、世代間伝承で存続すること」などを挙げることはできる。また、宗教の理念、理想と歴史的現実の墮落との落差も一般的で、比較の際に注意すべきである。

b) 日本人の宗教観

- ① 無宗教と宗教参加（死者儀礼、初詣等）。個人の信仰と家の宗教、地域の宗教。
- ② 一方では宗教は「常人には到達しがたい高尚な精神」、他方では「健全な人はハマらない怪しげな新宗教」とプラスとマイナス両極端にイメージされ、健全な常識人に宗教は不要と考えているのではないか。日本人は宗教を病や死との連想で捉えるが、イスラームでは病や死を宗教への入口として重視せず、健康な社会生活を宗教的生の場と捉える。
- ③ 一神教嫌いと戒律嫌い。

1 イスラームの基本教義

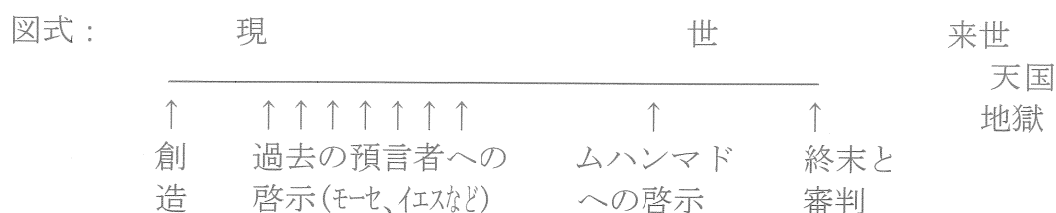
イスラーム成立当時、ササン朝ペルシアとビザンツ帝国が存在したが、アラビア半島はどちらの影響も受けていない。各地にキリスト教徒やユダヤ教徒が住んでいたが、大多数のアラブ人は、ジャーヒリーヤ（無知・無道の時代）と蔑称される古代未開宗教に属していた。それは、部族を中心とする血縁社会で、祖先崇拜と部族の守護神を崇拜する多神教、偶像崇拜の社会。

① コーランの内容と世界観：コーランは神がアラビア語で語った言葉。コーランは神のロゴスのアラビア語化で、キリスト教のイエス・キリスト（ロゴスの受肉）に相当する。発せられた言葉を重視する宗教。仏教は言葉以前、言葉にならない体験を重視する。

預言者ムハンマド（570?－632）はそれを人々に伝えたにすぎず、預言者は神の子や救世主ではなく、救済の権限はない。だが、イスラームの創唱者であり、ウンマの創設者で、政治・軍事面でのカリスマ的指導者。宗教者が政治家であるのは、イスラーム的宗教性に基づく。

② 神と人間の関係：神と人間の間には特別な人格や聖職者は不在で、神の言葉、コーランのみがある。各個人は啓示、神からの呼びかけに信仰か不信仰という形で応答し、

信仰者はコーラン（とシャリーア）に従って生き、その一生が終末の審判で裁かれ、永遠の来世を決定される。人生は一度限りで、輪廻転生はない。



③人間観：精神と身体の統合。神に直面する個人が社会生活を営む社会的存在。身体を卑しまず、身体的欲望を認めるゆえに、過度の禁欲を要求しない。結婚生活と経済活動を肯定する全員在家の宗教。シャリーアによる行為規範は在家の信仰者に対する身体的訓練で、禅の修行と類似するが、禅は性を否定する。

④ウンマ：信仰の共同体だが、同時にムスリムの生活共同体である。ウンマ・ムスリマとは神の意に適った信仰者の生活共同体。世俗社会の秩序維持を国家に委ね、霊的世界を司る教会との分離はない。個人の信仰と良心のみではウンマ・ムスリマは維持されず、何らかの客観的道德としての法を必要とする。信仰と生活の共同体には心情倫理と責任倫理、赦しの倫理と司法の倫理の統合を必要とする。それがシャリーアを必要とする根拠であり、ウンマの制度はシャリーアの制度化に支えられる。

⑤罪惡観：キリスト教では、過去から現在に及ぶ原罪の赦しを神に求めることが信仰だが、イスラームは原罪を認めない。それは、惡の始源を問わず、未来の審判から今ここで行う惡を抑制する。罪惡に楽観的ではなく、罪惡の現実を見据えているから、行為規範が与えられる。

2 シャリーアの理念と歴史的形態

①原義と理念：原義は水場へ至る道で、その理念は帰依の精神。精神を具体的な行為規範へ分節したものが行為規範。シャリーアは儀礼規範〔五行：礼拝・サラート、断食・サウム、メッカ巡礼・ハッジ、喜捨・ザカート、信仰告白・シャハーダ〕と社会規範〔婚姻、相続等に関する法規範、道德規範、生活規範〕の双方を含む。さらに、すべての信仰者の行為を、義務行為、推奨行為、避けるべき行為、禁止行為、さらに行っても行わなくてもかまわない行為の五段階に分けている。

②歴史的形成：コーランに含まれる規範。預言者のスンナ(模範的言行)〔冒頭に伝承者の系譜があり、スンナの記録が本文をなすハディースという形式で記録される〕。イスラーム以前の慣例・慣習の受容。コーランおよびスンナに基づく論理的類推(キヤース)。地方法学派の成立からスンナ派の正統四法学派へ。古典法理論による法源の確定；コーラン、スンナ、イジュマー(ウンマの合意)、キヤースの優先順位の決定。神学と法学の平行的関係。

③イスラームの政治：シャリーアによる統治。法の施行者・行政者はカリフやスルタンなどで、法の解释权・改廃権は法学者(ウラマー)にある。イスラームには理論上

は教会と国家の分離はないが、歴史的には国家がシャリーア以外の法、近代の西洋法などに基づく統治がなされた。キリスト教は逆に教会と国家の分離から出発し、中世に両者を統合し、近代に再度分離した。

3 イスラームと近代化

①近代化までの歴史

a) ギリシアの伝統の受容：8～9世紀、アッバース朝初期にギリシアの諸学問がアラビア語に翻訳された。ファルサファ（イスラーム哲学）はギリシア哲学研究で、多くの注釈書が書かれた。イスラーム神学はギリシア哲学の影響を受けた形而上学的神学。その他、医学、天文学、数学、化学などの自然科学も受容され、イベリア半島でキリスト教世界に影響を与え、ルネサンスをもたらした。だが、イスラーム世界ではルネサンスに相当する知的革新や近代科学は生じず、産業革命に至らなかった。

b) スーフィズム（イスラーム神秘主義）：禁欲的な修行を通じて神との合一を求める立場だが、独立した派ではない。スーフィズムは一方で新プラトン主義の影響を受けた神秘思想・神秘哲学を構築し、他方では民衆化し、神と合一したスーフィーを聖者と認め、聖者廟を崇拝し、呪力崇拝や現世利益と結びついた。その結果シャリーアが軽視された。

②イスラームの近代化：オスマン帝国の支配下にあった中東各地に、主に英仏が侵略し植民地統治を始める。第二次大戦終了後、パレスティナ分割とイスラエル建国。数次にわたる中東戦争と和平の試みと挫折。

a) 西洋化：西洋近代社会をモデルにした社会改革（科学技術の導入と教育の普及、民主主義や議会制度など）を推進する。初期の近代主義は、西洋化と同時にシャリーア改革によるイスラーム社会の改革を遂行しようとした。だが、手っ取り早い改革として、西洋化を目指す動向を世俗主義と呼ぶ。トルコ共和国はこの例。しかし、トルコには、多くのイスラーム的社会理念が残存して、イスラーム社会であり続けている。非西洋社会の近代化という点で、日本の近代化を再考するヒントを与える。

b) 復興主義（原理主義）：西洋法を導入せず、コーランの新しい解釈に基づくイスラーム的近代の達成を目指す。イスラームにとって信仰と社会・政治の統合が重要で、政教分離を拒否。ヒューマニズムは植民地統治者には見られず、民主主義や自由平等の近代的価値観はキリスト教に教わらなくても、コーランに記されているという確信に基づく。サウジアラビア、イラン、タリバーン、エジプトのムスリム同胞団など。

「コーランとスンナに戻れ」という復興主義は、初期イスラームの栄光を現代に再現することが近代化となると主張するが、現実には女性の社会進出の妨害など極端な反近代的現象をもたらした。ただし、すべての復興主義がテロなどの暴力を肯定するわけではない。

現代におけるイスラーム

アフリカは過去の植民地支配に起因する紛争や貧困を抱え、インドもヨーロッパ列強の支配を受けたが、イスラーム世界が最も強く欧米に異義申立てをする。それは、同じ一神教でしかも過去には優越していたという自負があり、対抗意識が強いことによる。欧米は植民地支配等を宗教とは無関係な世俗的問題と考えるが、イスラーム世界ではそれもキリスト教の問題と捉える。日本人は国際法やグローバル基準を理性に

基づく普遍的なものと考えるが、イスラームではキリスト教的だと感じる。欧米とは異なるイスラーム的近代の可能性、政教分離の必然性が問題となる。日本では、現代の宗教は科学・理性と共存可能かを問うが、イスラームでは第一に宗教と社会、政治の関係が議論される。

パレスティナ問題の解決の必要。欧米主導の国連の二重基準（イスラエルが有する核兵器への査察はないなど）。欧米とイスラーム世界の対立が目立つが、過去のイスラームは他宗教に寛容な宗教だったことを教訓として、富裕な強者に異質な文化との共存を考え、対策を実行する責任が重く、その必要がある。

